

平成28年度 第66回高知県芸術祭
第45回 高知県芸術祭文芸賞

入選作品集



文芸賞・文芸奨励賞・佳作



〔短 歌〕	芸術祭文芸賞	石元美紀・谷口益恵・山崎マリ	山脇志津	45
	芸術祭文芸奨励賞	田上悦子・松原一成		45
	作	不破陽子・川上理恵 野村丞子・今井桃子		47
〔俳 句〕	芸術祭文芸賞	山崎光子・山中 則・大窪雅子	柴 岡 弘 城	49
	芸術祭文芸奨励賞	竹崎いと・山下正雄		49
	作	大前逸子・西込とき・田村乙女 橋詰千恵・石崎雅男・徳弘賀年子 中村梅子・廣澤權士・北岡水遠・谷脇光太郎		51
〔川 柳〕	芸術祭文芸賞		富士田 三 郎	55
	芸術祭文芸奨励賞	土居志保子・岡林裕子・近藤真奈 藤田ゆずあ・濱田久子		55
	作	橋田綾子・岡本美優・桑名知華子 江口桂子・佐野佳葉子・森乃 鈴 川澤歩佳・北岡水遠・里見忠純・中越 涼		57
〔審 査 評〕				61
〔作品集要項〕				66
〔短編小説〕	芸術祭文芸賞	響	大崎正徳	1
	芸術祭文芸奨励賞	屋	西村雅人	6
	散 髪	シャッター	西村更紗	11
〔詩〕	芸術祭文芸賞	色 即 是 空	高橋治光	17
	芸術祭文芸奨励賞	二人だと	國 廣 聖	20
	朱 夏	私が死んだなら	童 眼 まさみ	22
	ヒガンバナ	小さなお葬式	和 田 よしみ	24
	送 り	さらさら宝箱	濱 田 喬 子	27
	おおい SAWAMURUくん	中学一年生	重 田 真 人	32
	ひこうき雲		下 元 雅 彦	35
			東 村 豊 彦	38
			澤 村 あすか	40
			井 関 翼	42

残響

高知市 大崎 正徳

八月だというのに、母さんの墓は雪の結晶で覆われた岩みだいにきらきら光っていた。早朝に強い雨が降ったからだ、と父さんが言った。雨はもう止んでいて、太陽の帰還で息を吹き返した無数の蟬の戦陣が、砦めがけてたたまたましく鳴きわめいていた。

夏に母さんの墓参りに来たのは四度目だった。母さんの墓は山の傾斜から海を見渡すように建てられていて、この時期でも涼しい風が吹いた。目を細めて遠くを見ると、空の青と海の青が一つに繋がって見え、船が空を飛んでいるように見えることもあった。

ぬかるんだ赤土にばたばたと雫を落とす深緑色の植物を手早く新聞紙に包みながら、シキミとい

うその植物が毒をもっていることを、父さんはいつものようにほくに説明した。初めてその話を聞いたとき、毒の葉に触れる父さんの姿に怯えて仕方なかった。でもあれから四年が経ち、ほくは十一歳になっていた。シキミはもう怖くはなかった。

父さんは首に掛けていたタオルで頬の汗を拭いた後、口ひげを揺らすくらい深い鼻息を吐き出し、母さんの墓を見つめた。父さんは、台所で料理を作る母さんの背中を見つめているかのように、愛おしげで、もの言いたげな表情をしていた。でもそこに味噌汁や肉じゃがの匂いはなく、あるのは草と土とほのかな雨の匂いだけだった。

ほくも父さんの真似をして深い息を吐き、母さんの墓の前で手を合わせた。目をつぶると夏の気配がぐっと近づいてきて、太陽や蟬の位置がよりはっきりと把握できた。次第にほく自身が夏の一部となり、空と海とが水平線を越えて混ざり合うように、ほくの身体が夏という色の中にとけ込んでいく気がした。そしてその色の中には母さんも

いた。母さんはほくの正面に立って冷たい麦茶を注いでくれていた。母さんは生きていた。ほくは歓喜し、麦茶に手を伸ばした。そのとき、とーんという音が微かに頭のなかに響いた。

その音は、先週の水泳教室の帰りに学校で聞いた音だった。

五年生にもなって二十五メートルを泳ぎ切れな

とーんという音は、最初頭の上から降ってくるようにほくに届いた。耳の奥につまった心地悪い水のせいでうまく聞き取れなかったけれど、それは確かに上からだった。

ほくは音のした方を見上げつつ首を傾け、酔っぱらった大人がするみたいに、片足で何度かふらふら飛び跳ねた。じゅんと低い音がして耳から水が抜け、遠くで鳴っていたヒグラシの声がぐんと近くなった。ほくはまさに雲を掴むという表情で宙を見渡し、音のありかを探してみた。綿菓子みたいな夏雲が音もなくのっしりと東に流れていた。

とーん、ととん、と今度は連続した音が聞こえた。低い音と高い音が同時に鳴っているような不思議な音。それはどうやら東校舎の最上階から聞こえているようだった。

夏休み中で誰もいないはずの校舎から聞こえてくる音にほくは一瞬たじろぎ、すぐにその場を立ち去ろうとしたけれど、どうしてもその音が気になった。それに、赤帽組でも一応上級生のブライ

シャツの袖の匂いを嗅ぎ、自分の身体がプールの臭くないか一度確かめた後、校舎の中にそろりと入っていった。

最上階への階段を上る頃には、とーんの正体はもう見破って、いや聞き破っていた。

音に近づいていく程に、とーんはもつと複雑な響きに変わり、とーんたんとんであったり、たつたとんたんであったりしたのだけれど、とにかくそれはピアノの音だった。誰の曲かはわからないけれど、一定のリズムの中にメロディーが乗っ

ていて、とても綺麗な曲だった。時々囁くように静かになったり、時々跳ね上がるように大きくなったり、まるで何人かの人が交代で各々の感情を語り合っているような、そんな曲だった。

ほくはいつのまにか音楽室の目の前に立っていた。音楽室のドアには大きな丸窓がついてあったけれど、この位置からはピアノが見えなかった。ほくはドアが音をたてないよう蛙みたいに両手をそろりとドアに張り付け、丸窓におでこをへばり付けてめいっぱい眼球を右に動かしてみた。自

分の鼻息で曇った丸窓からはほかにプールの匂いがした。

ピアノを弾いていたのは女の子だった。ほくと同い年ぐらいだろうか。真夏なのに餅みたいに肌が白くて、たまご形の眼鏡をかけている。前髪に付けた赤い髪どめが、奏でている曲とは不均衡な幼さを見せている。

女の子はこちら向きで座っていたけれど、目線はずっと手元にあって、ほくの方には気付いていない様子だった。時折同じフレーズを違う抑揚で弾き直したり、一旦手を止めて譜面らしきものをのぞき込んだりしながら、無くした何かを探し求めるようにピアノに向かっていった。誰かと話しているような様子もなく、部屋の中には彼女ひとりらしかった。

しばらく彼女の様子に見入ったあと、次第に姿勢が辛くなってきて、曲の調子が盛り上がった瞬間を見計らって、ほくはドアから手を離した。そして汗で湿った手のひらをズボンで拭き取りながらそっとその場を離れた。途中何度か振り返る

ほくを、廊下に響くピアノの音がやわらかく包み込んだ。

「ほく、どうしたんで」という背後からの声に、ほくは飛び上がりそうになった。ちょうど二階から一階に降りようとした時に、その低い声はほくを捕まえた。

振り返ると事務員の小池さんが立っていた。小池さんは大仏みたいなヘアスタイルで通称パンチさんとも呼ばれていたけれど、その風貌とは異なり、生徒から慕われるとても温和な人柄だった。それにほくの父さんとはむかし草野球の試合をしたとかなんとかで、時々学校でほくに話しかけてくれることもあった。

「ああ、きえちゃんか」と、パンチさんは領きながら言った。でもその表情は何処かしら寂しそうにも見えた。とーんと微かなピアノの音がほくとパンチさんの頭上を漂った。

それからパンチさんは、その音の持ち主であるきえちゃんについて教えてくれた。

ほくより一つ上の六年生だということ、石巻という町で暮らしていたけれど津波で家が流され、親戚に引き取られて高知に移り住んだこと、時々こうして休日の音楽室でピアノを弾いていること、弾いているのはきえちゃんのお姉さんが好きだった曲であること。

目を開けるとやっぱり母さんはいなかった。そこにあるのは母さんの名前が刻まれた墓と、さつきさんが並べた紙コップの珈琲、いくつかのお菓子、白いユリの花、そしてシキミだった。父さんはさつきから一滴も減っていない珈琲を母さんの代わりにぐっと飲み干し、行こうかと、静かにほかに言った。

家に帰った後、ぼくは学校に向かった。日の暮れ始めた校舎には人の気配がなく、さえちゃんのピアノも聞こえてこなかった。ぼくは素早く東校舎に入り、階段を駆け上がった。そして音楽室に誰もいないことを確かめた後、ドアを開けて中に入り、ピアノの前に立った。弾き方はわからなかったけれど、人差し指で白い鍵盤をいくつか適当に押してみた。思った以上に大きな音がして、振動がお腹まで響いてきた。やがてその振動は心臓や喉を通して頬つたやまぶたに伝わり、それまで堪えていた涙をどっと溢れさせた。

さえちゃんがどんな気持ちでこのピアノを弾いていたのか、ぼくにはその理由がちゃんとはわからなかった。ただ、次第に減衰していくピアノの響きは、自分の中で少しずつ薄れていく記憶に似ていた。音はやがて滲むように風景に溶け、静寂だけがそこに残った。お姉さんが好きだった曲、さえちゃんはその曲を何度も奏でることで、薄れていくお姉さんの記憶を、心の中に繋ぎ止めようとしていたんじゃないだろうか。

ぼくは母さんを思い浮かべた。忘れかけていた母さんの顔や声を、できる限り鮮明に思い浮かべてみた。そしてもう一度鍵盤を押さえた。さつきよりも強く。西日が差し込み始めた音楽室はオレンジ色に染まり、濃くなった光と影の境界線の上で、ピアノの残響が泡のように漂っていた。

芸術祭文芸奨励賞二編

散髪屋

南国市 西村 雅人

子どもの時から、ずっと同じ理容店で散髪をしてきた。小学生の頃は、後頭部の生え際と両耳のまわりを一気にバリカンで刈り上げ、あとはハサミとクシを使ってチヨキチヨキと手早く切ったものである。あの頃の店内に響いていた散髪バサミの心地良いリズムカルな音が、半世紀の時を超えて、記憶の底から私の耳によみがえってくる。

中学、高校は丸坊主だったので、バリカンだけですんだ。途中で反抗期に入り、あまり物を言わなくなってきた私に、店主はバリカンをかけながら、何気ない話題で話しかけてくれた。東京で大学生活を送るようになると、長髪に無精ひげの私は、帰省するたびに、親に言われて散髪に行かされた。大学を卒業し、高知に帰って勤め人になってから

も、ずっとその店で髪を切ってもらった。

店の名は山田理容店。私が小学三年の時、その店は開店した。昭和三十年代の終わり頃のことである。店主の山田さんは二十歳そこそこの青年だった。彼は地元を離れ、九州の理容学校を卒業して、帰郷したばかりだった。

良い香りの店内、新品の理容椅子、きれいに磨いた大きな鏡、なめらかなクリーム色の洗面台、何から何までが真新しく輝いていた。

子どもたちにとってもうれしかったのは、散髪をしなくても、何種類もの少年漫画雑誌を読ませてもらえたことである。読んでいるとキャラクターをくれたり、ラムネやジュースを飲ませてくれた。山田理容店のサービスの良さは地元で有名になり、「近くにあるもう一軒の散髪屋より下手やから、ジュースで客を引きゆうがじゃ」などと悪口を言う人もいたが、店はいつ行っても客がいっぱいで、もう一軒の店には客がほとんどいなかった。

ある日、散髪代をポケットに入れて山田理容店

に行く、座る所もないほど混んでいて、仕方なく私はもう一軒の店へ行くことにした。その店は坂道を少し登った所であって、古ぼけたガラス戸を開けると、客は一人もいなかった。その店主は、「下の店がいっぱいじゃったから来たんか？」と、散髪しながら柔らかな声で訊いた。私はすまないような気持ちで、「うん」と答えた。私は彼の店を見捨てた客の一人だった。その店は、山田理容店ができるまでは、近所で唯一の散髪屋だった。腕も良いという評判で、日曜日などは、客が店内いっぱいになり並んでいるのが往來からよく見えたものだった。ところが、サービスの良い新しい店に客を取られてしまっ、そのさびれた店の主は、いつの間にかいなくなってしまう。「あの人は高知へ引っ越したがやと？」母が言った。悲感のような物が私の胸をよぎった。

私が中学生になった頃、山田理容店に若いお嬢さんが九州からやって来た。若奥さんは善良そうであつた顔にメガネをかけていた。笑うと二

つの澄んだ目が線になって、純朴な人柄が表れた。店の仕事は新しい分業体制でおこなわれるようになった。まず店主の山田さんが散髪、ひげ剃り、毛そり等をして、そのあと若奥さんがシャンプーで洗髪してドライヤーで乾かし、最後に山田さんが仕上げをする。奥さんが洗髪を始めると、店主は次の客を二台目の理容椅子に座らせて散髪を始めるのである。

思春期の入り口にいた私は、若い女性に頭を洗ってもらうことは、気恥ずかしくもあり、また秘かな喜びでもあった。何かの拍子に、彼女のすべすべした腕が頬に触れたり、胸や腹部が私の体のどこかに軽く押し付けられたりすると、私の心臓は急にドキドキし始めるのだった。散髪に来て奥さんの姿が見えない時は、何となく残念な気持ちになった。

ある日、散髪が終わって帰ろうとしていると、奥さんに呼び止められた。「西村くんは高知の本屋に行ったりするの？」「はい。学校から帰る時にととき行ききます」

私は高知市の私立中学に通っていた。「じゃあ、お願いしていいかなあ。本を買いたい」「いいですよ。何という本ですか?」「レーチェル・カーソンの『生と死の妙薬』という本なの」

彼女は著者名と本の題名を紙に書いて、本代と一緒にそれを私に手渡した。奥さんから個人的な頼みごとをされたことで、私は誇らしい気持ちになり、うれしかった。

翌日、行きつけの本屋で注文し、三週間後に頼まれた本を奥さんに届けることができた。その後しばらくの間、その本のどことなくロマンチックな題名と純朴な彼女のイメージが、頭の中で重なり離れたりしていた。

奥さんの思い出をもうひとつ。私が東京の大学生活を終えて、ふるさとに帰って初めて山田理容店に行った時のことである。(その店で最後に散髪してもらってから二、三年ほどたっていたと思ふ)私が高知で就職が決まったことを伝えると、

彼女は親しみを込めてにっこり笑い、「お帰りなさい、西村くん。お久しぶり。就職おめでとう!」

と言ってくれた。奥さんは娘とした可憐な洋服を着ていて、無垢な心がそのまま服装に表れているような印象を私は抱いた。彼女は、「西村くん、コーヒーは飲む?」とか、「BGMはどんな音楽がいい?」とか色々々と尋ねてくれて、細やかに気を配ってくれた。そうした心遣いはもちろんうれしかったのだが、私が一番うれしかったのは、大人になった私を昔のように「西村くん」と優しく呼んでくれる人がいることだった。

あれから長い長い年月が過ぎ去った。山田夫妻には娘が生まれ、成長し、美容師になった。彼女は同業者と結婚し、隣の県で美容院を経営している。残念なことには、山田夫妻は離婚し、奥さんは九州に帰ってしまった。

今年の春、私は六十歳で定年退職した。朝夕の国府川沿いのウォーキングが日課である。歩きな

がら、五年前の出来事を時々思い出す。

その日、予約をするため、山田理容店に電話すると、「今日はもう疲れて店じまいしたがよ。明日の朝おいで」と店主は妙なしゃがれ声で言った。声に元気がなかった。

翌朝、店に行く、普段は店先でグルグル回っている赤と白と青のサインポールが止まっている。店内に照明がついていなかった。薄暗い店の中に入ると、山田さんがソファからしんどそうに立ち上がって、私に理容椅子に座るように手で促す。

「店を休みにしてあるから、電気を消して散髪するさね。電気がついたら客が入って来るかもしれないから」山田さんの声は消え入るようにかすれ、力がなかった。私だけ特別に散髪してくれようである。

まずバリカンで、次にハサミとクシで、私が小学生だった頃と同じ手順で散髪はおこなわれた。ハサミはチヨキリ、チヨキリと、今にも止まりそうなくらい遅かった。

「おまんの散髪がすんだら、病院に行つて入院す

るさ。糖尿病じゃ」

「ええ？ 入院する日に仕事をさせてしもうて：言うてくれたら頼まんかったに：」

「かまん、かまん。入院する前にやりたかったがやき」店主は満足そうに言った。

散髪が終わって店を出る時に、「絶対に良くなつてくさいね。待ちゆうきね」と、私は山田さんの目を見ながら言った。彼は黄疸で黄色くなった顔をこりとさせて、うなずいた。

私は山田さんが退院して店を再開する日を待ち続けた。店の前を車で通る時は、いつも三色のサインポールが回っていないか確かめた。結局それは二度と回ることにはなかった。山田さんの死は、父から聞いた。「あの散髪屋さんは、入院して間もなく亡くなったそうじゃ。はやすぎるねえ：」悔やむような口調だった。とうとう私は、山田理容店の最後の客になってしまった。

山田さんが亡くなって五年が過ぎた。主のいなくなった理容店は、時間が止まったままである。私は近くを通るたびに、白い壁と三角屋根の瀟洒

な店の外観を眺める。山田理容店は、北国の小さな駅舎を連想させた。列車が通り過ぎるだけで、誰も利用しない駅——「廃駅」という言葉が心に浮かぶのだった。

先月のある日のことである。まだ陽は高かったが、私は夕方のウォーキングに出かけた。何気なく山田理容店の横を通るコースを選んだ。店の前のある横断歩道を渡っていると、入り口のドアが半分開いているのに気づいた。店内に灯りがついていて、人影が見えた。私はドアの前で立ち止まり、中を覗いた。そこにいたのは、山田さんの娘だった。彼女は私に気づき、ドアまでやって来た。「帰っちゃうかね。久しぶりじゃね。今日はどうしたぞね？」私は言った。

「お店が傷んでないか、様子を見に来ました」彼女は答えた。母親によく似ている。

私は店の中を見てもいいか尋ねた。娘は快諾した。店内に入ると、カウンターにハサミとクシがきちんと置いてあるのが見えた。

「二階に上がりませんか。この店の跡継ぎに会ってください」彼女は明るく言った。一階が店で二階は生活スペースになっていた。

二階にある居間のソファで、小さな男の子が眠っていた。床に絵本が落ちていた。

「満三歳です。大きくなったら、この店を継いでもらおうと思っています。そうだったら、また散髪に来てくさいね」

「それまで生きちゅうろうかねえ」

「生きてますよ。生きてください」

「じゃあ、がんばるか」

彼女は笑顔で頷いた。壁に掛けた写真の中で、若い山田さんと奥さんが、こつちを見ながら仲良く頬笑んでいた。

シャッター

土佐高等学校二年 西 更 紗

自分がない。これは私にとって最大のコンプレックスだった。

高校二年生の終わりごろだっただろうか。ほんやりと優しすぎる春の日差しを浴びながら放課後に一人、一番後ろの窓際の席から誰もいない中庭を眺めていた。振り返れば模試の成績も定期テストの成績も伸びず、進路も決められず、記憶に残らない一年だった気がした。そう思うとなんだかぞっとして、急いで廊下に飛び出してみたけれどやっぱり誰もいなかった。取り残されるってこういうことなのだろう。考えることが怖くなって荷物をまとめて薄暗い学校を後にした。

それから何日たったかなど到底覚えていないが、終業式の日を迎えた。その日は空一面に重い雲が広がり寒さこそ和らいだものの冬みあいだった。

まだ私はほんやりしていた。

高校二年最後のホームルーム、クラスメイトはみな次のクラス替えの話題で持ちきりで、いつもより落ち着かないものだった。私もその話題に加わっていたものの、仲間内に同じ進路になる者はいなくて同じクラスになりそうになかった。それでも一通り別れを惜しんで思い出話を花を咲かせた。そして数日前と同じようにほんやり中庭を眺めた。雨が降っていた。

ホームルームが終わりに差しかかるころ、「和泉、和泉桜」

と二度名前を呼ばれ、はっと我に返った。担任は呆れた顔をして笑った。少し恥ずかしくなった。高校二年最後の日に盛り上がるクラスメイトたちはすぐに教室から出て行った。みな遊びに行くらしかった。誘われたけれど断って、担任の元へ急いだ。

用件は春休みの宿題に関することだった。短編小説を課す、それだけだった。本当の意味で受験生になろうとしているこの時期にどうして、と思

うかもしれないが私大の推薦を狙い早く受験を終わらせようと考えていた私には時間に余裕があったし、小論文ばかり練習していたのでいい気分転換になると担任は考えてくれたのだろう。生徒の輪に入りいつも熱いけれどまだ若くて頼りない担任があまり好きではなかったけどこの宿題の配慮は嬉しかった。周りの受験生の空気を感ぜなくて良かったからだ。だから私はこの課題に全力で取り組もうと決意した。いつの間にか雨は止んでいて辺りは優しいオレンジ色に包まれていた。

相当やる気になっていた私は、家に着いて早々お気に入りの音楽をイヤホンから流し、家にあった原稿用紙と使い慣れたシャープペンを用意した。なんとなく美しい風景をテーマに書きたいなんて思っていたけれど、書き始めから躓いた。何かの小説で読んだような、何かの映画で見たような、そんなありきたりな表現しか出てこなかった。イヤホンから溢れんばかりに次から次へと出てくる美しい言葉やリズムを聴いているうちになんだか負けた気がして、無力さを突き付けられた気がし

て、すぐに投げ出してしまった。「普通」って本当につまらない。

ベッドから臘月を見ながら眠りに落ちる前にも少しだけ考えてみたが、夢見がちな表現だとか気取った表現だとかそういうものばかりだった。自分のどこを探しても言葉は見つからなかった。い加減嫌気がさして、ぎゅゅと目を瞑って眠った。

これを合格前の最後の遊びにするという友達に誘われるままに遊びに出かけ、数日の間この小説の課題から無意識のうちに遠ざかっていた。

三つ下の弟の陸上の地区大会だとか何とか言いながら両親と弟は早朝から出ていき、家は珍しく静けさに包まれ、ふと課題を手にした。向き合おうと思った。

変わらず美しい風景を文字にしようと思つた。私は「桜」という名前だったから桜には思い入れが強かった。

「春と言えばやっぱり桜かな」そう呟いて思い浮かべられた景色は、嫌にふわ

ふわした甘ったるいピンク色がただ一面に広がっているだけだった。愕然とした。今まで大事にしてきた自分の一部を否定された気がした。それと同時に自分という存在がいかに空っぽであったかということに気付いた。覚悟して私は考え続けた。見つめ続けた。

素直に表現できない自分、友達にさえ本心を言えない自分、笑ってごまかす自分、なんとなく日々を過ごして、個性がない自分。泣かないし怒らないけど愛想笑いばかりしてきた気がする。遠慮もたくさんしてきた気がする。一七歳ながらこの課題は人生の分岐点になる、とまで思った。

それから自分について積極的に考えようとした。ラジオのお悩み相談室、インターネットの心理テスト、あまり多くは眠らなかつたけどたまに見る夢の夢占い。色々な手段を使って、いろいろな角度から自分を見つめた。

でもやっぱり答えは出なかった。そもそも答えなどないのかもしれないと思った。研究者ってこんな感覚なのかなと思ってみたりそんな楽観的な

自分を恥じたりもした。

ある時ついに思いたった。外に出よう、と。春休みも中盤に差し掛かり思い悩むうちに桜はもう満開になっていた。

久しぶりに高校生らしく髪の毛をふんわり巻いて去年買った白くてかわいらしいブラウスを着て明るい気持ちで路面電車に乗った。

車窓から見える移りゆく風景にドキッとした。思わず涙が流れそうになって慌てて拭いた。今までも見てきたはずの景色なのにこんな気持ちになつたのはいつぶりだろうか。

小さな駅に降り立った。そして小学生のころに祖父と来た覚えのある桜が綺麗に見える小さな丘まで来てみた。祖父がこっそり教えてくれた穴場だった。ふわりと優しい風が吹くとその時の思い出が蘇った。それから私は夢中になって桜を眺め、祖父にももらった古ぼけたカメラを手にして写真を撮一枚撮ってみた。桜はもう散り始めていたように私の頭に小さな花びらが降ってきた。思わずつま先で立って手を伸ばした。そのまま空を見上げる

と、オレンジとピンクが少しずつ入り混じった世界が展開されていた。私がイメージしていた甘ったるいピンク色はそこにはなかった。もっと自然な色だった。

今まで悩み思ひ詰めていたものがスッと消えた。体が軽くなって、人がいないことを確認して少しだけスキップしてみた。そしてお気に入りのフレーズを口ずさんでみた。本当にすっきりした。心が溶かされていくのを感じた。それと同時に胸に溢れる思いがもどかしくなって今なら文字に起こせると思った。

それからはあっと言う間だった。自分の思いを正直に書くことができた。清々しかった。自分を見つめるために自分の中ばかりを探したが、やっぱり何もなくて、外の世界や周りから得ることが大事だと気付いた。自惚れかもしれないが、成長できた気がした。

小説が書きあがると居てもたつてもいられなくなつて担任の元へ急いだ。担任を見つけると素直に今までの思いを話し、正直に感謝を伝えた。も

て視界の端に映る工場が稼働し始める。こうして一日の始まりを感じながら私も頑張ろうと勇気づけられる。

外回りを終えて本社に戻る途中の夕方のピンク色の空。薄くて細長い雲を見つけた時には天使の羽を見たようで嬉しくなる。仕事を終え、帰宅途中の夜景。星はほとんど見られないがビルや街灯の光も綺麗だ。そんな素敵な景色を見た時には迷わずシャッターを押している。

気付くと夜が深まっていた。久しぶりに写真を手にしてからもう何時間も考えこんでいたみたいだった。時計の針はとくに午前0時を回っていた。

色即是空

高知市 高橋治光

汽車 汽車 シュッポッポ
シュッポ シュッポ シュッポッポ
あの子を乗せて
シュッポ シュッポ シュッポッポ

力強く走る汽車が大好きだった
ある日不思議な現象に気が付いた
機関車から吐き出された黒煙が消えてゆく
どうやら空が喰ってるようだ

万葉の花が大地を叩き

数多の紅葉も大地を叩くが
大地の色は残らない
やっぱり空が喰ってるようだ

少しの灰を僕に残して
あの子は煙になっちゃった
そして煙は見えなくなった
空に喰われてしまったようだ

汽車の姿が見えなくなった
月がぐっすり寝ている夜に
終着駅からあの子を乗せて
銀河の国へ行ったのだろうか

耳を澄ませば聞こえてくるよ
小さな星の彼方から
野菊のような あの子を乗せて
シュッポ シュッポ シュッポッポ
あの子の夢も いっぱい乗せて
シュッポ シュッポ シュッポッポ

もうすぐ僕も あの子の傍で
シュッポ シュッポ シュッポッポ
シュッポ シュッポ シュッポッポ
……!

二人だと

高知市 國 廣 聖

君は杖で
僕は車いす
一人だと
歩くのにちよつと疲れる
二人だと
君は杖をもってない方の手で
僕の車いすをつかみ
もたれることができる
僕は君に車いすを押してもらえるので
楽ちん

朱 夏

高知市 童 眼 まさみ

ねえ どうして夏はあかいつていうの？
じゃあ 赤いと言えは何かあると思う？
スイカ イチゴ りんご さくらんぼかな
食いしん坊だね 食べ物ばかり
ちがうよ まだいっばい知ってるから
はいはい じゃあ赤くて怖いものは？
うーん こわいもの こわい こわ 血！
そうだね 血は真っ赤で怖いよね
ケガしたら いっばい出てくるもん
痛い時 見ること多いでしょ
うん ママがいっばい出たら死んじゃうって

そうなんだ 手をつないで歩けるんだ

君は杖で

僕は車いす

一人だとビュッフェのおかずを
とってこれない

二人だと

僕がおぼんとお皿をひぎに乗せて

君がおかずをとってお皿に入れて

僕がテーブルまで運べる

それを二回くり返せば二人分

おいしくご飯が食べれる

二人だと

二人だと

二人なら……

世界はもつと広がって目の前に現れる

君が教えてくれた素敵なこと

そのとおり だから いのちなの

いのちのちって血なんだ

ちからのちも血なんだよ

へえ——ぜんぜん知らなかった

じゃあね 夏になったら力が出てこない？

いっばい出るよ うれしいから

でしょ だから夏は赤いんだ

夏はいのちの季節なんだよ

いのちのきせつ？

そう みんな力が出る時さ

体中に血をどどん巡らせて

よりたくさん朱くなるんだよ

傷つけば痛いこと 嬉しいと力が出ること

いのちの大切なこと お互いに思い合っ

やさしく 笑顔になれちゃうんだ

おじちゃん ありがとう

ほくも夏には あかくなるね

私が死んだなら

高知市 和田 よしみ

私が死んだなら花になりたい
コチヨランやカサプランカやヒマワリより
早明浦ダム畔にそうつと咲くコオカギやコッ
ポの花がいい

私が死んだなら木になりたい
ゴボー根のスギやヒノキはお断わりだ
太りは遅くてもたつぶり水を含むケヤキやド
ングリを実らせて小動物を養うブナやミズナ
ラを望みたい

私が死んだなら鳥になりたい
ハクトウワシやコンドルやハクチョウには及
ばない
過疎の集落に初夏を告げ棚田の害虫をついば
むコシアカツバメなら大満足だ

私が死んだなら魚になりたい
ハマチやカツオやタイは似合わない、アユや
アメゴはなおさらだ
こんまい淵で泳ぐメダカでいいしモツゴでも
いいし、今や誰もうけないイダでも又いい

私が死んだなら獣になりたい
ホッキョクグマやムースやアフリカゾウは御
免こうむりたい
人口五百人の大川村の牧場でモグリモグリ草
を食むトサアカウシで結構だ

いやいや花だの木だの鳥だの魚だの獣だのは
贅沢だ

もしも私が死んだならば土に、一魂の土にな
りたい
大川村よりまだ奥の細長い空の故里の土留め
をした畑でお婆があずり打つ、痩せ土になれ
れば本望だ

※コオカギ：ネム コッポ：ホタルブクロ ムース：ヘラジカ

ヒガンバナ

高知市 甫 木 恵 美

町からこの村に縁あって嫁いできました
赤い口紅をつけていたので
村人からはヒガンバナと呼ばれていました
そのことばの端々から
忌み嫌う感情が
じぶんに向けられているのがわかりました

村の女たちがしているように
一日中家事をしながら
野良仕事に精を出し
いつの間にか
鏡を見ることも
赤い口紅もなくなりました

28

慣れない畑仕事に疲れると
近くに流れる小川で顔と手を洗い
平らな安定した石を探して
その上に腰かけて
いつときの休息をとりました
川面には
忘れかけていたじぶんの姿が映って
揺らいでいました
ヒガンバナ
だれが植えたでもなく
ここに咲く
この花を一番好きで一番憎んでいるのは
このわたし
白く咲くことを心に決めました
村に馴染んで生きていくために
白いヒガンバナ
身体中を流れる血液は赤い花が咲いて
ドクドクと脈打っています

小さなお葬式

高知市 濱 田 喬 子

スングリーのとりに竹むと
あの頃の幻影が目に浮かぶ
今でも胸が疼く
中国東北部での出来事

十四歳の夏
学徒動員令で配属された開拓団で
級友が短い人生を終えた
電気も 水道も 薬も無い 僻地で
ハルビン駅から
汽車で北滿の大平原を走り

29

トロッコに乗り替えて地平線を走り
小舟で濁った川を渡り
荷馬車に揺られて
やっと着いた開拓団
北へ約二百五十軒の強行軍だった
S子さん あなたはその開拓団で
帰らぬ旅に出たのです
野原で摘んだ小さな花を供え
N先生の説経を聞きながら
あなたを茶毘に……
S子さんのご遺族は
悲しみや
怒りを
無言で抱きしめていた
声のない叫びは 空間を貫いて
地平線まで流れていった
広野の真ん中の 小さなお葬式

30

燃え尽きる炎の
最後の輝きを脳裏に焼き付けて
開拓団に別れを告げたのは
ソ連侵攻の直前
一九四五年七月下旬だった

※スングアリー：（アムール河 ウスリー河を経てウラジオストックにつながる中国東北部の大河）

佳
作

送
り

高知市 下 元 真 人

白胡蝶蘭 高級菓子 初めて会う親戚たち
名前忘れた 従妹？ モゴモゴと挨拶
窮屈なズボン ちよつと尿意 まあいいか
太く短い鼻 閉じた目 まつげの白髪
そろった前歯 入れ歯か それすら知らない
ああこんな顔 だったのか いまさら何を
分厚い座布団 窮屈に整列
座りきれない人脈 いまさらながら
意味の分からない呪文 神妙な顔で

聞こえない耳 開いたまま動かない唇
握り返してこない指 大きな爪半月
鼻穴に白い詰め物 取り敢えず末期の水
いなくなつた悲しみよりも 足の痺れ
名前の分からぬ会釈 延々と
残された荷物の重さ 途方にくれる
あつい火葬炉冷たく 緊張した挨拶
父を送るといふ 一世一代の大事業
無事終わったのか 失敗したのか
わからぬまま 耳に絡みつく
聞こえない悪口 思い過ごししか
確かに聞こえた 父からのねぎらい
白い布で包んだ箱重く やれやれ
父の飲みかけた 高級ブランドイ
口にして・ふう・ 残った息を吐く

テレビをつけると お笑い番組
高級お菓子食べながら チビチビとほろ酔い
つついっ・あはは・・とまらぬ笑い
さほど悲しくは ないけれど
寂しさに消せないテレビ

34

きらきら宝箱

高知県立高知追手前高等学校二年 重田 雅

かけっこで一番になったこと
逆上がりができるようになったこと
先生にほめられたこと
お父さんが頭をなでくれたこと
お母さんに抱っこしてもらったこと

みんなみんな だいじな思い出
だからね ぜんぶ宝箱に入れておくの

何かいいことある度に
ひとつずつ そおっと入れていくんだよ
きらきらがどんどん増えていって
すぐくすてきなんだよ

ときどき開けてみると
きらきらがいっぱいわくわくするの
それでね きらきらを取り出すと
にこにこになれるよ
でもね

宝箱はそんなに大きくないの
だからね いっぱいになったら
ひとつずつ こぼれていっちゃうの
思い出をわすれたくないから
宝箱に入れたのに
にこにこしていたいから

36

35

宝箱に入れたのに

思い出といっしょに

涙がこぼれちゃう

それでも

こぼれた分をがんばってかき集めて
思い出せんぶ だいにしたいな

おおい SAWAMURくん

高知市 澤村 豊彦

おっとりしや それから
僕と俺とは私の見なんて
悠長なことをつぶやきどころでなく
さつきから柳街をかつぼする僕を見失いそ
うだ
たそがれの街角に 犬のおしこのように
ちっちゃい へのへのもへのちゃん も書
いておこう
夕闇にまみれ 他人と他人の若者たちは
機械を凝視し 指先だけで無言のおしゃべり
に熱中する

若いお母さん お腹の児には 声に出して
日本語でかたりかけてあげてね

おおい SAWAMURくん

透明人間になりかけた僕は 僕を必死で追
跡する

やわらかなお芋畑の下をどこまでも掘りす
すめば 地球の裏にぬけられる と去年の暮
につくった僕のすじがきどおりに
りおで じゃあね 色と地球のすきまを
くぐって ABEちゃんがやってくれたよ

平成な時を 平静に過ぎてきたはずなのに
JAPANなのかNIPPONなのか

なにがなんだか なにぬねの
ひらがなだけが必死で戦争しているこの国
の若木の桜の花弁二片に

む とん だけを書きこみ
おおきにと僕は

夕暮の紅水川に
蟻が十歳 なら芋虫二十歳 と流してあげる
いろはにはへと 散りぬるを・・・

中学一年生

高知大学教育学部附属中学校一年 東

あすか

40

なんだろうこの気持ち
新鮮っていうか
複雑っていうか
言葉に表せないようなこの気持ち

制服を整えて登校する毎日
部活の先輩に怒られてばかりの毎日
いつもと変わらない毎日
なんだろうこの気持ち
自分でも分からないこの気持ち

身近にいる人は感じてくれる
この気持ち
中学一年生のこの気持ち
気持ちって大切だと感じたこの気持ち

41

ひこうき雲

津野町立東津野中学校一年 井 関 翼

42

青い空
どこからきたのか
ひこうき雲
青いスケッチブック
ライン描きて 消えていく
ひこうき雲
若くて青い 私的心
いついつまでもなくなるらない
ひこうき雲

青い水たまり
かすかに残る残像よ
ひこうき雲

43

芸術祭文芸賞一首

混迷の時代なればこそ孫の未来さきくあれとぞ祈るはちがつ

高知市 山脇志津

芸術祭文芸奨励賞五首

夜空から落ち葉がそつと落ちてくるその葉の色は夜空の色だ

土佐市立高岡第一小学校六年 石元美妃

手秤に分量確かめ施肥を為す農夫の指の太き節ぶし

高岡郡中土佐町 谷口益恵

46

国民に添い四半世紀の天皇の言葉あたらし象徴のかたち

高知市 山崎マリ

にぎり返す力伝わる手のひらにことばを持たぬ生徒の返事

高知市 田上悦子

認知症になっても彼は船乗りか部下の名を呼び船橋に立つ

室戸市 松原一成

佳作

もらい風呂の裸電球ほの暗く五右衛門釜に背の痛かりき

土佐清水市 不破陽子

SFのロボット攻め来るときのごと風車列なす遠山の尾根

高岡郡四万十町 川上理恵

肝試し暗闇に一人怖すぎて早く来てよと待つお化け役

土佐高等学校二年 曾根明香里

47

一票を投じて帰る道に会うユニフォームの少年の自転車の列

高知市 野村丞子

君からの返信来たる午前二時フェイスブックは眠たげな顔

土佐塾高等学校三年 今井桃子

48

芸術祭文芸賞一句

炎天や赤秀の気根地に届き

幡多郡大月町 柴岡弘城

芸術祭文芸奨励賞五句

軍鶏を抱き戦歴を抱き夕端居

南国市 山崎光子

冬瓜の煮くづるるままうすみどり

高知市 山中則

神楽見に十六夜の城上りけり

高知市 大窪雅子

まむし酒その後の話きかざりし

高岡郡佐川町 竹崎いと

尾根行くは天刑めきし露時雨

吾川郡いの町 山下正雄

佳作

遍路ゆく蝸の木を振りかへり

四万十市 大前逸子

藻の花や昔木舟の通学路

高知市 西込とき

すすき野をまっすぐ行けと母の声

高知市 田村乙女

月白や人の気配の近づきぬ

南国市 橋詰千恵

初産の馬小屋に先ず新走り

四万十市 石崎雅男

手品する男も老いて敬老日

長岡郡大豊町 徳賀年子

栗拾ふ日課しばらく加はれる

高岡郡日高村

中村梅子

虫めがねのぞくと小さい春見える

土佐市立高岡第一小学校五年

廣澤權士

夢みたいちようちよわたしにとまったよ

土佐市立高岡第一小学校五年

北岡永遠

友と飛ぶ沈下橋跡蟬しぐれ

土佐高等学校二年

谷脇光太郎

芸術祭文芸賞一句

無人機が戦のいろは知りたがる

高知市

富士田三郎

芸術祭文芸奨励賞五句

無印のこころを包む掌

南国市

土居志保子

アルバムに風の座った椅子ひとつ

吾川郡いの町

岡林裕子

満月のむこうにたつぷりの秘密

高知市

近藤真奈

めざましはぜんぜんやくにたちません

土佐市立高岡第一小学校二年

藤田ゆずあ

五番街のマリーを探すスマホ手に

高知市

濱田久子

佳
作

矢印は迷路を向いて立っている

南国市 橋田綾子

満月に魚がいると思う雨

高知市 岡本美優

風なのね囁き上手なんだもの

高知市 桑名知華子

いつからか行方不明になった夢

宿毛市 江口桂子

「前・ならえ」ならって列はくねくねと

高岡郡日高村 佐野佳葉子

優しさはいらぬAIなんだから

吾川郡いの町 森乃鈴

オリオン座足をふり上げヨガをする

土佐市立高岡第一小学校五年 川澤歩佳

カマキリは秋のにおいをつかまえる

土佐市立高岡第一小学校五年 北岡永遠

土食べるくいしんぼうのトラクター

須崎市立浦ノ内小学校二年 里見忠純

雲ひとつ残さず晴れるひみつの日

四万十市立東中筋小学校五年 中越涼

短編小説審査評

今年の応募作品数は五四編、十三歳から八十三歳まで、幅広い年齢層からの応募があり読み応えがあった。特に、十代からの応募が三編もあり、将来に向けて心強い。

審査の結果、次の三編を入賞とした。

「残響」 四年前に亡くなった母親に思いをはせる小学五年生の男子と、津波で亡くなった姉を慕う小学六年生の女子の、交わることのないふれあい描かれている。女子は、姉が好きだったピアノ曲を弾くことで薄れてゆく姉の記憶を繋ぎ止めようとし、男子は、鍵盤をたたいて母のことを思う。その残響が西日の射し込む教室に漂っている。静かで余韻の残る作品に仕上がっているが、冒頭の文章が分りにくく、推敲の余地があるだろう。

「散髪屋」 主人公が小学生のときから利用している散髪屋の盛衰を、主人公の成長とともに描いた作品である。昭和三十年代終わり頃の散髪屋の雰囲気や、店の若奥さんに触れたときのときめきなどがうまく描かれていて好感が持てるが、なぶん物語の設定が五十年ほどと長く、薄味な感じがするのはやむをえない。

「シャッター」 いまは東京に住む女性が、二十年近く前に

撮った一枚の写真の手に、地方に住んでいた高校二年生の自分を回想する話である。その頃の私は自分というものがなく、まわりに同調するだけの生き方だった。しかし、短編小説を書くという課題を与えられたとき、自分に正直になることの大切さを発見する。この作者は十七歳であるが、きらりと光るものを持っている。

その他、次のような作品が心に残った。

「UFOの記憶、そしてマチコ」(岡本健二) この作者の文章力は確かであり、書かれていることがすんなりと頭に入ってくる。しかし、この小説で何を伝えたいのか、それが見えてこないのが残念であった。

「さなき」(やまだあかり) 母子家庭の親子の関係が描かれている。原稿用紙七枚と短めだが、そこに込められたものは力強い。しかし、なぜ文章の途中で改行したり、ある言葉がカタカナにしたりするのか、その理由がわからなかった。推敲の余地があるだろう。

「ダイブ」(柴田 由) この作品は読みやすい。読みやすいは作者の力量だが、それだけではなにか物足りない。もっと心をゆさぶられるものがほしかった。

(審査員——杉本雅史、米沢朝子、文真、若江克己)

詩審査評

作品は二二六編、五歳から八十三歳までは幅広い応募があった。

文芸賞は高橋治光「色即是空」。愛しい子供との別れも「シュッポッポ」という音にたとえ、別離の辛さや悲しさをうまく表現している。いつの世も太古から、空は人生の喜怒哀楽を唄っているのだが、その着眼点がいい。最後の一行は余分だと思う。

奨励賞は五編。國廣聖「二人だ」と。生き苦しい時代である。耳をすませば、ファシズムの足音が聞こえてくる時代である。科学技術に支えられた高度に発達した資本主義社会のなかで、多くの人々が、このころと身体を病み、蠢いている時代である。その中でこの詩のように、二人で、いや二人といわず手をつなぎ支えあえなければ、生きてゆけない時代が、もうとくくに来ているのに、皆みたくない知りたくないのだ。「二人だ」と二人だとして世界はもっとと広がって目の前に現れる。わたしなら最後の一行除きます。

童眼まじみ「朱夏」。夏の朱と果物の赤と血と命と力を結びつけて、上手に書きあげている。夏に力のでない人の血は何色かな。

和田よしみ「私が死んだなら」。死んだなら生まれ育った

土地の花や木や動物になりたいという。いやいや「一塊の土になりたい」といい「故里の土留めをした畑でお婆があずり打つ、瘦せ土になれば本望だ」という。悟りとはある種の諦めかもしれない。この世は何かを諦めないと生きてゆけないのだ。みこと。

南木恵菜「ヒガンバナ」。村の息苦しさをとる町の孤独をとるか。赤いヒガンバナが村に馴染むために白いヒガンバナになり、すっかり馴染んでしまえば、もつと赤いヒガンバナになって、村中を染めあげようとする。

濱田喬子「小さなお葬式」。時代の記録として重要である。怒りや悲しみを無言で抱きしめているだけではいけない。すでに戦争は始まっている。

佳作は五編。下元真人「送り」とかく湿りがちな葬式を、からつと書き上げている。参考までにこんな詩もあります

「末期の水／おかわり」(母) 重田雅「さらさら宝箱 あなとも入れる、もつとと大きな宝箱を手に入れよと願う。澤村豊彦「おおい、S.A.W.A.M.U.R.U.」。ペーソスに満ちた一編。時代をよくみている批評眼と皮肉っぽい諧謔がいい。東あすか「中学一年生」。よこれまっただ大人には、決して書けない詩。井関翼「ひこうき雲」。三連がよ。あなともいつの日か、おおきな「ひこうき雲」になつてくたさい。

(審査員——猪野睦、小松弘愛、文真、長尾彰)

短歌審査評

今年は一三三名から三〇首、昨年比二一八%の応募があった。年齢別には最高齢九十五歳、最年少十一歳で、作品は昨年同様五十歳以上が大半を占めている。一方学校からの応募は高岡第一小学校、附属中学校、東洋野中学校、土佐高等学校、高知追手前高等学校、高知高専の六校。

文芸賞は

混迷の時代なればこそ孫の未来さきくあれと祈るはちがつ 山脇 志津

戦後七十一年の今年自衛隊はすでに実働訓練を行っている。七十二歳の作者は、孫の未来と日本の未来を憂い無事であれと祈っている。日本人にとって八月は特別の月。結句を日本特有の平仮名書きとして、作者は思いの深さを強調している。共感を呼ぶ一首。

(順番は、受付番号順)

夜空から落葉がそつと落ちてくるその葉の色は夜空の色だ 石元 美紀

作者は十一歳。落葉がそつと落ちてくるその一瞬をとらえ、葉の色を見た。夜空の色だった。表現も率直でその感性が素晴らしい。

手梓に分量確かめ施肥を為す農夫の指の太き節がし 谷口 益恵

永い間農業に従事してきた農夫のある日常の一端をさりげなく詠んだ一首。初句と結句が効いて、作者の温かさが伝わってくる。

山崎 マリ

国民に添い四半世紀天皇の言葉あたらし象徴のかたち

ご高輪の陛下は生前退位についてメッセージを発表され、国民の理解が得られることを切に願っています。と呼びかけられた。作者はこれ新しい象徴のかたちと詠んでいる。にぎり返す力伝わる手のひらにこぼれ持たぬ生徒の返事 田上 悦子

コミュニケーションをとる事が難しい生徒と教師との意志伝達のできた瞬間を詠んだ一首。伝達の方法は、にぎり返す力でありその一瞬の教師のよこげと感動である。認知症になつても彼は船乗りか部下の名を呼び船橋に立つ 松原 一成

漁港の町に住む作者は、認知症の友の事実のみを伝えて暗さを感じさせない。同郷の友であろうか静かに見守る作者の姿勢が見える。

佳作 不破陽子 川上理恵 曾根明香理 十六歳 土佐高等学校 野村丞子 今井桃子 十七歳 土佐高等学校

(審査員——市川敦子、梶田順子、文真・中野百世)

俳句審査評

応募七六五句、前年比二二六%、応募人数は二九八人で二二三%であった。応募人数の倍増は、小中学、高校生の応募増によるもので、先生方の指導や部活の成果であろう。最高齢九十五歳、最年少八歳であった。三審査員が予選した八三句について検討し、文芸賞一句、文芸奨励賞五句、佳作十句を決定した。

文芸賞は

炎天や赤秀の気根地に屈き 柴岡 弘城

「赤秀」は、クワ科の亜熱帯高木で高さ約二〇m、幹の周囲から気根を出す。県内では、室戸岬や足摺岬、大月町で自生が見られる。

「炎天」は万象を威圧するような炎気だが、眼前の赤秀は気根を隆々と地にまで届かし、毅然としたもの。厳しい季語に赤秀の実相を配して、植物の生命力の強さと風土性を濃く詠んで格調高い。

文芸奨励賞には次の五句を選んだ。

軍鶏を抱き戦歴を抱き夕端居 山崎 光子

「夕端居」は、夏の夕方、涼をとるために縁先などに出ること。闘鶏師でもあるのだろう。引き締った風貌の人が思われる。軍鶏をいとしみ抱いているが、かつて戦争で戦

地を経験した人。激動の時代を越えてきた男の姿を表出している。

山 中 則

冬瓜の煮くづるまますみどり

「冬瓜」は、味も香りも淡泊だが、含め煮や冬瓜汁にして、だしを十分に吸わせると美味。果実は淡緑で煮ると透き通ってくる。煮込んでいる様子で、変化をよく捉えている。

神楽見に十六夜の城上りけり 大窪 雅子

今年、中秋の名月を挟んで9月16日から19日まで「秋のお城まつり」が高知城で行われ、各地の神楽が催された。その神楽を見ようと石段を上る作者。「十六夜の城」というところに伝統芸能と照応する趣があっている。

まむし酒その後の話さかざりし 竹崎 いと

「まむし酒」は、強壮剤として効用があるとされている。掲句、さして深刻な場面ではなく、酒席などで余興的に飲み、話が出たのではないか。酒脱、機微に触れて面白い。

尾根行くは天刑めきし露時雨 山下 正雄

中七から単独登山のように思われる。「露時雨」は、時雨が降ったように地上のものが濡れた様子。そのような尾根を行くのは「天刑」を受けるような一種の孤絶感。妥協を許さずに行く意志強い作者がでている。

(審査員——橋田憲明、味元昭次、文真、松林朝香)

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は四七三句、人数は一〇六人で、句数、応募者ともに昨年を上回った。七歳から九十五歳と他分野よりも幅広い年齢層からの応募だった。今回は川柳ならではの社会的な句や、ジュニアの新鮮な表現の句が例年にも増して多かった。審査員三人は一句一句を慎重に審査にあたり、次のように受賞作を決めた。今回もジュニアの参加が多く、とくに高岡第一小学校からたくさん応募をいただいた。

文芸賞は次の一句。
無人機が戦のいろは知りたがる 富士田 三郎
戦は人間の業のように、止むことがない。世界ではますます戦の時代の様相を呈している。最近は何とかが危険を冒さず、手を汚すことのない無人機での爆撃がある。「なぜここへ飛ばされるのか聞きたい」、無機質の無人機から撃墜されても痛まないひとへの精一杯の抗議の声が作者には聞こえる。今の時代を切り取った社会的な句、しかも深いメッセージを持つ秀句。
次に、文芸奨励賞
無印のころを包む拳 土居 志保子
「無印のころ」と「たなごころ」の音の響き合いが心地いい。子どもだけではなく、働き盛りの少し離れたころも、認知症で言葉では表現できないころも、みんな素直な部分を持っている。そして、それをそのまま受け取るうとの作者の優しさが伝わってくる。
アルバムに風の座った椅子ひとつ 岡林 裕子

集合写真に一つだけ空いた椅子がある。本来はあの人がいる場所なのに、そこだけ欠けている。「風の座った椅子」が素敵な表現で、透明感のある爽やかな一句。作者はころのアルバムをめぐっていたのだろうか。

満月のむこうにたつぷりの秘密 近藤 真奈
国の政治からひとりのころまで、秘密にしていることがある。その秘密はなんでもない小さなものから国を揺るがすものまで、いつもあふれ出そうになる。情報公開をしない政治への批判と読むこともできる一句。「たつぷりの」が効果的。

めざましはぜんぜんやくにたちません 藤田 ゆずあ
声を出して読んでほしい。そして、五七五で少し聞かずに置いて読んでいただきたい。この世界は散文ではなくて短詩である。応募最年少の七歳の感性に、思わず笑ってしまい、そしてはっとする。川柳は技巧ではなく、感性で成り立つのだ。「詩のころは何か」を大人に突きつける。今年度の多くのジュニア作品の中の秀逸の一句。高岡第一小は連年の受賞。
五番街のマリーを探すスマホ手に 濱田 久子
ポケモンGOをはじめ、スマートフォンを手に街を歩く人たちが多くなった。阿久悠作詞の名曲「五番街のマリー」も、今の時代ならスマホで検索してもっと簡単に見つかったのだらう。しかし、それでは歌にならないし、ドラマは生まれない。現代の風潮への批判を、「五番街のマリー」に語らせたのが鋭い。
（審査員―窪田和広、西川富恵、文責・小笠原望）
※審査評の年齢は応募時の年齢を記載しています。

平成二十八年年度高知県芸術祭 文芸賞作品募集要項

一、趣 旨
高知県芸術祭文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募し、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主 催
高知県（公財）高知県文化財団

三、主 管
高知県芸術祭実行委員会
（事務局（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説 一人一編
詩 一人一編
短 歌 一人三首以内
俳 句 一人五句以内
川 柳 一人五句以内

五、締 切 日
平成二十八年九月三十日（金）当日必着

六、作品送付先
〒781-1833 高知市高須三三三―二
（公財）高知県文化財団内
「高知県芸術祭実行委員会事務局」あて

七、発 表
平成二十八年十一月初旬に本人及び報道機関あてに通知します。（平成二十八年十一月二十七日に表彰式を行います。）

八、選 賞
短編小説 「高知県芸術祭文芸賞」一編
表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」二編
表彰状と副賞
他の部門 「高知県芸術祭文芸賞」一編
表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」五編
表彰状と副賞
他に佳作を選ぶことがあります。
佳作には表彰状と副賞が授与されます。

九、応募の注意事項

●類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

去発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。
*私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。
*その他、上記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

①部門名 ②氏名（ペンネームご使用の場合は併記）
③住所 ④電話番号 ⑤年齢を必ず明記してください。
記載場所等は部門ごとに異なります。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説 ■作品本文は四百字詰原稿用紙十枚以内。



*応募作品は返却しません。
*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。
ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。
*入選作品の著作権は、高知県及び(公財)高知県文化財団が所有します。

十三 審査員(五十音順)

短編小説・杉本 雅史 米沢 朝子 若江 克己
詩 .. 猪野 睦 小松 弘愛 長尾 軫
短 歌..市川 敦子 梶田 順子 中野 百世
俳 句..橋田 恵明 松林 朝蒼 味元 昭次
川 柳..小笠原 望 窪田 和広 西川 富恵

十四 問い合わせ先

〔高知県芸術祭実行委員会事務局〕
〔公財〕高知県文化財団内
(TEL) 〇八八―八六六―八〇三三

二〇一六年十一月二十七日 発行
編集発行 高知県芸術祭実行委員会
事務局 高知県高知市高須三五三―二
(公財)高知県文化財団内
印刷所 高知市城山町三六
西富 騰 写 堂
(非 売 品)